

活動報告

「あいち医療通訳カフェ」という試み

愛知県立大学多文化共生研究所客員共同研究員
金 千佳

2017年12月17日に開催したシンポジウム「医療現場での外国語コミュニケーション支援に向けて」（あいち医療通訳システム推進協議会と本学との共催）の開始前に、プレ・イベントとして「医療通訳者・コミュニケーション支援者の交流セッション」を実施した。医療通訳のニーズの高まりとは裏腹に、活躍や学びの場、情報の少なさに加え、医療通訳者を含め医療通訳に関わる者同士のつながりが希薄であることが指摘された。医療通訳への理解がまだまだ不十分な医療現場に単独で赴き、不安や悩みを抱えても守秘義務があるため誰にも相談できずに抱え込んでしまう、医療通訳者の孤独も浮かび上がった。それからちょうど1年を迎えるにあたり、医療通訳者の他、様々な形で医療通訳に関わる者同士が集い、言語の枠を越えて気軽に医療通訳や医療現場での経験を語り合える場、励まし合いながらモチベーションを維持し、学びあえる場として、多文化共生研究所主催「あいち医療通訳カフェ」を開催する運びとなった。

第1回は平成30年12月18日（火）10時～12時に、愛知県立大学サテライトキャンパスにて開催した。医療機関の診療時間である平日日中に稼働できる、現役医療通訳者の参加を見込んでまずは平日開催とした。事務局3名（小池康弘教授、糸魚川美樹准教授、筆者）を含め26名でのスタートとなった。小池教授からの挨拶の後、医療通訳業務にも通ずる「守秘義務」の重要性とともに「カフェへの参加ルール」が説明がなされた。参加者の自己紹介の後、糸魚川准教授から「日本の医療通訳制度の現状」について報告された。その後は各言語に分かれ「勉強方法」をテーマにフリーディ

スカッションを行い、最後に全体で共有した。

参加者にアンケートを実施したところ、「言語や組織、職種の枠を越えて、医療通訳に関わる者同士が集える場」ができたことに対する喜びや感謝、今後への期待が綴られていた。また、医療の専門家や外国人（患者）当事者の話が聞きたいという希望も多く、医療通訳に関わる様々な関係者の、相互理解を深めて行く必要性が示唆された。

第2回は同じ会場にて、平成31年1月29日（火）10時～12時に開催し、20名の参加を得た。アンケート結果も踏まえ、「地域における在住外国人の健康問題」および「派遣型医療通訳者の現状と課題」という2つのテーマを挙げ、話題提供として参加者2名に各15分のプレゼン発表を行っていただき、その後各テーマについて全体でディスカッションを行った。

第1回・第2回ともに参加者の約半数が稼働経験のある派遣型医療通訳者であり、その他に医療機関にて医療通訳や国際業務に関わる方々の参加もあった。また、本学医療分野ポルトガル語スペイン語講座修了生で医療従事者でもある方々の参加もあり、視点に広がりのある非常にあたたかな場になっている。医療機関に勤務する方々から週末にも開催して欲しいという声も受け、第3回（2/24）および第4回（3/24）は日曜日に開催予定である。リピート参加者もある一方、毎回新たな参加者も迎えており、今後の広がりも期待される。参加者とともに試行錯誤しながら場を育て、この地域の医療通訳の充実に貢献できるよう、今後も定期的に開催していく予定である。

